

わたしの学校経営

高校と特別支援学校の一体的経営

尾崎文雄・兵庫県立阪神昆陽高等学校校長兼阪神昆陽特別支援学校校長

本年4月9日、兵庫県伊丹市の同一敷地に県立阪神昆陽高等学校と県立阪神昆陽特別支援学校が開校した。

阪神昆陽高等学校は、近隣の定時制高校3校(県立川西高等学校、同宝塚良元校、伊丹市立高等学校)を再編した普通科の多部制単位制高校で、修業年限は3年以上、前後期の2学期制をとり、2012年度の募集定員は、1部2クラス、2部2クラス、3部3クラス、計280人である。阪神昆陽特別支援学校は、知的障害のある生徒を対象とした、職業科の特別支援学校(高等部単独)で、修業年限は3年、阪神昆陽高等学校と同じく2学期制をとり、12年度入学者の募集定員は、1学年6学級、計48人である。

両校の交流および共同学習

両校は同一敷地に設置されたというメリットを生かして、教育活動全般にわたり交流および共同学習を行っている。

一つ目は、日常生活での交流および共同学習で、昼食時や休み時間、登下校時での交流である。昼休みになると、体育館1階の食堂は、両校の生徒

が一緒になって食事をしている風景が見られる。

二つ目は、特別活動や部活動での交流および共同学習である。これまで、開校式・入学式、始業式、体育祭などを合同で実施してきた。9月15日の阪神丹有地区高等学校定時制生徒生活体験発表大会には、校内大会を踏まえて阪神昆陽特別支援学校の生徒も特別出演し、素晴らしい発表を行った。

三つ目は、授業での交流および共同学習である。開校1年目は、音楽・美術・情報・体育の四つの授業で、両校の授業担当者のチームティーチングにより行っており、各科目の中で実施可能な内容について、両校生徒が共に学んでいる。

両校の一体的経営

両校が教育活動全般にわたり交流および共同学習を実施していくためには、校長として可能な限り両校を一体的に経営していく必要があり、さまざまな工夫や取り組みを行っている。

第一に、組織上の工夫である。両校の校長は1人が兼務している。ただ、一人校長は両校の広範囲にわたる校務を担当せねばならず、さまざまな

課題に対し迅速かつ適切に対応することが難しい。そこで特別支援学校に副校長が1人配置されており、特別支援学校の校務のうち、校長があらかじめ定める範囲内で、校長の職務の一部を処理させている。

また、特別支援学校副校長と両校の教頭については、校長の両校一体的経営を助けるために、両校兼務とされている(副校長は高校教頭を兼務)。さらに、両校の総務部長・教務部長・生徒指導部長は両校兼務であり、交流および共同学習に係る連絡調整と指導助言に当たらせている。

第二に、校章・校歌・校訓・標準服・学校要覧・学校案内・ホームページなどをできる限り共通化した。特に、校章や校歌、校訓は、学校のシンボルの存在であり、それらを共通化することで、両校の教職員や生徒はもとより、対外的にも「両校は一体」ということが強く認識されると考える。

第三に、学校業務でのさまざまな取り組みである。具体例を幾つか挙げると①両校管理職会を毎週定期的に実施する②両校合同の職員会議を随時実施する③交流および共同学習など両校に共通する課題について合同委員会を実施する④高校の「心のサポート委員会」に特別支援学校職員が常時参加する⑤入試業務などを相互に支援し合う⑥学校評議員会を合同で実施する――などである。

以上、両校の一体的経営を中心に述べたが、校長が職員や生徒などに対して「両校は一体」と語り続け、具体的行動で示していくことが重要と考え、「日常実践」(校訓)に努めている。